

〈原 著〉

# 中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望

東京都公立中学校を対象とした調査から

中村 恭子\*

A research on the transition of the dance curriculum in junior high schools which follow the new guidelines for physical education as compulsory and coeducational  
Based on a survey of public junior high schools in Tokyo

Kyoko NAKAMURA\*

## Abstract

The purpose of this research was to investigate the transition of the dance curriculum which resulted from the transformation of the new guidelines for the sports field curriculum in physical education in junior high schools from optional to compulsory and coeducational. The data were collected from fiscal 2008, 2009, and 2012. The subjects were 627 physical education teachers from public junior high schools in Tokyo.

The results were as follows:

1. The implementation rate of the dance classes has been increasing year by year, particularly for male students. However, the implementation rate of compulsory dance classes has not been increasing as much.
2. The time provided for the dance curriculum of male students has been less than that of female students.
3. There were two different types of dance classes provided for male students. One was a male-only class, and the other was a mixed class. Consequently, female-only classes were in decline.
4. The number of male dance instructors has been increasing since the implementation of the new curriculum. In most cases, they're in charge of the male-only classes and the mixed classes.
5. Modern rhythm dance was taught the most frequently in all types of classes. Next was folk dance in the mixed classes, and creative dance in the female-only classes. However, in most cases, the modern rhythm dance classes were taught incorrectly.
6. Although teachers felt that they needed to learn teaching methods for dance and get acquire skills in teaching dance, many have not learned how to teach dance.

From the above, we can observe that, although the number of dance classes has been increasing, the quality of these dance classes has been declining.

Key words: the transition of the dance curriculum, new guidelines, compulsory, coeducational

## 1. 緒 言

平成20年3月告示の新中学校学習指導要領<sup>2)</sup>では、教育活動を進めるに当たり、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して

\* 順天堂大学スポーツ健康科学部 (ダンス運動学研究室)

Seminar of Dance Movement, School of Health and Sports Science, Juntendo University

課題を解決するために必要な思考力, 判断力, 表現力その他の能力をはぐくむとともに, 主体的に学習に取り組む態度を養い, 個性を生かす教育の充実に努めなければならない, としている. これを受けて保健体育科では, 生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて「多くの領域の学習を経験する時期」<sup>3)</sup>として, 中学1・2年生において「武道」「ダンス」を含む全ての運動領域を男女必修で履修させることとする改訂が示された. 実施は平成21年度からであり, 平成23年度までを移行期間, 平成24年度から完全実施と定めている<sup>1)</sup>.

これまで, ダンス領域は平成元年の改訂<sup>6)</sup>で男女共修となり, 平成10年の改訂<sup>4)</sup>で従来の「創作ダンス」「フォークダンス」に加えて新たに「現代的なリズムのダンス」が導入され3種目から選択履修できるようにするなど, 学習指導要領改訂の度に大きな変遷を経てきた. しかし, 筆者らの実態調査<sup>9)~11)</sup>によると, 男女共修といっても「武道」との選択履修であったり, 学校選択によりダンスを全く実施しない学校が4割程度もあったり, 現代的なリズムのダンスでは「リズムの取り方や動きを工夫したり, 相手と対応したりして, 全身でリズムをとらえて自由に踊る」<sup>5)</sup>という動きの創出学習を意図した学習指導要領解説に反して教師の一斉指導による既成の運動技術が教授されたり, ビデオ映像等の踊りを模倣させるだけの放任授業が展開されていたり, 決して充実した実施状況ではなかった.

そこで著者は今回の改訂がどの程度実現し, ダンス授業に変化をもたらすのかについて教育現場の動向を見るため, 新学習指導要領告示直後の平成20年3月に東京都公立中学校を対象とした実態調査および教員の意識調査<sup>8)</sup>を実施した. その結果, 6割強の学校から新学習指導要領実施後には男子にもダンス授業を実施する計画であるとの回答を得た. 反面, 男子のダンス授業実施には多くの不安材料が残されており, 実施後の経過観察と対応策検討の必要性が認められた. ただし, 平成20年3月の調査で得た結果はあくまでも新学習指導要領実施前の予定に過ぎず, 実際の変化は実施後の実態を見なければ正

しく評価できない.

そこで, 本研究では新たに新中学校学習指導要領告示後の平成20年度, 先行実施開始後の21年度の授業計画および完全実施となる平成24年度の計画とを合わせて調査し, 保健体育科の体育分野運動領域必修化(以下, 全領域必修化とする)を受けてダンス授業がどのように変容してきているのか, また今後の展望はどうなるのかについて分析することを目的とした.

## 2. 方 法

### 2.1 調査方法

東京都公立中学校全626校を対象に, 平成20年度(新中学校学習指導要領告示後), 平成21年度(新中学校学習指導要領先行実施開始)のダンス授業計画の実態調査, 平成24年度(新中学校学習指導要領完全実施年度)のダンス授業の年間計画(予定), およびダンス男女必修化に関する意識調査を実施した(表1参照). 回答は各校の保健体育科教員のうち, 主任教員もしくはダンス担当教員1名に依頼した. 調査用紙の配布・回収は郵送法により, 回収率は39.5%(247校/626校)であった. 調査期間は平成21年4月~5月であった.

### 2.2 分析方法

項目間の比較においては欠損値のある回答を除外し, 分析項目毎の回答総数を有効回答とみなして分析対象とした. 比率の差の検定には二項分布の正規近似からの検定を, 平均値の差の検定にはt検定を, 項目間の相関分析にはPearsonの相関係数を用いた.

## 3. 結 果

### 3.1 調査対象の特性

#### 3.1.1 教員配置数

1校あたりの保健体育科教員配置数は専任教員のみで男性教員1.6名, 女性教員0.7名, 計2.3名, 女性教員配置率は30.0%であった. 非常勤講師を含めると男性教員2.0名, 女性教員1.1名, 計3.1名, 女性教員配置率は35.5%であった(回答数244校・無回答

表1 調査内容

調 査 項 目		回答形式
基礎調査	(1)対象校特性 保健体育科教員数	記 入
	(2)回答者特性 性別・年齢・職責・ダンス指導経験年数	記 入
ダンス授業計画の実態調査 (学年・男女別) 平成20年度計画 平成21年度計画 平成24年度計画	(1)年間計画の有無	選択肢
	(2)必修・選択の別	選択肢
	(3)クラス編成	選択肢
	(4)年間配当時数	記 入
	(5)授業担当教員	選択肢
	(6)採択ダンス種目	選択肢, 他記述
	(7)各種目の授業内容(平成20年度計画のみ)	選択肢, 他記述
意識調査	ダンス男女必修化に対する評価, その理由	5段階評価, 選択肢, 他記述
	男女共習・別習に対する評価, その理由	5段階評価, 選択肢, 他記述
	指導法研修・教材研究の現状, その理由	5段階評価, 選択肢, 他記述
	その他, 自由記述の意見	記述式

表2 回答者特性

性別	回答者数	職 位						平均年齢	ダンス指導 経験年数	指導経験 男女差
		主任	主任+ ダンス	ダンス 担当	非常勤 講師	その他	不明			
男性	128	112	2	3	2	0	9	43.1	2.7	***
女性	116	47	10	23	3	5	28	43.2	15.6	
不明	3	0	0	0	0	0	3	—	—	
計	247	159	12	26	5	5	40	43.1	8.5	

\*\*\* p&lt;0.001

3校)。また、専任教員のみでは女性教員0名(男性教員のみ)の学校が244校中80校(32.8%)、女性教員1名の学校が155校(63.5%)、非常勤講師を含めると女性教員0名(男性教員のみ)の学校が244校中32校(13.1%)、女性教員1名の学校が165校(67.6%)であった。男性教員に比較して女性教員の配置率は約半数であり、男女教員の配置数には有意な差が認められた。

### 3.1.2 回答者特性

回答者特性を表2に示した。

性別回答者の52.5%が男性教員(平均年齢43.1±9.7歳)、47.5%が女性教員(平均年齢43.2±11.6歳)であった。

ダンス指導経験年数は、男性教員2.7年、女性教

員15.6年で有意な差が認められた。女性教員でダンス指導経験が全くない人は2名であったが、男性教員では指導経験年数回答者112名中45名(40.2%)が指導経験なしであった。また、女性教員は年齢とダンス指導経験年数が $r=.885$ 、1%水準で高い相関関係にあったが、男性教員は $r=.235$ 、5%水準の非常に弱い関係が認められただけであった。

職位回答者のうち主任(主任および主任でダンス担当)の占める割合は82.6%であった。回答者の多くが主任教員であり、カリキュラム決定の責任者からの回答であった。したがって、本調査結果における平成24年度計画の実現可能性はかなり高いと推察できる。

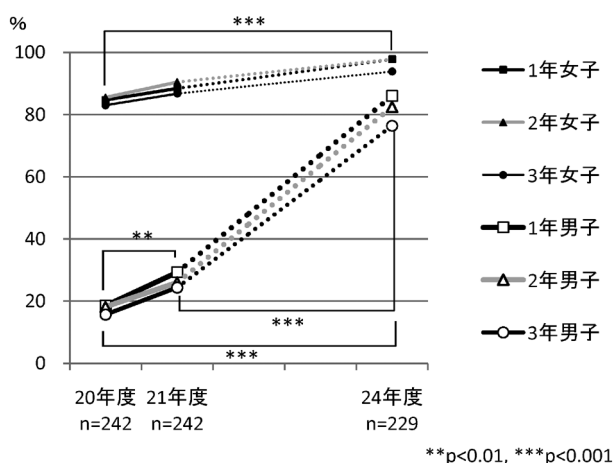


図1 ダンス授業計画の年次推移

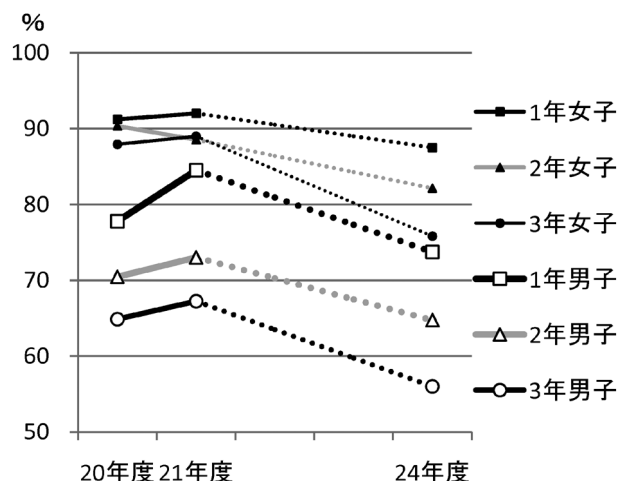


図2-1 ダンス授業計画の必修率の年次推移

### 3.2 ダンス授業計画の年次推移

#### 3.2.1 体育年間計画中のダンス配分の有無

平成20年度、21年度において体育年間計画の中にダンス領域を配分した学校および平成24年度においてダンス領域を配分する予定であると回答した学校の割合について年次推移をみると、1年生女子では平成20年度で84.7%の実施率であったものが年々漸増し、平成21年度で88.4%、完全実施の平成24年度には97.8%に達する見込みであり、有意な増加が認められた。1年生男子では平成20年度で18.6%の実施率であったものが、平成21年度には29.3%まで増加していた。さらに移行期間の3年間で50%近くの学校が新たな実施を計画しており、平成24年度には86.0%に達する見込みであった。男子のダンス実施率は各年度間でもそれぞれ有意差が認められ、毎年、確実に増加していた。2,3年生も同様の傾向にあった(図1)。

#### 3.2.2 ダンス授業計画の必修率と1,2年生必修実施率

ダンス授業計画の必修率(実施計画のうち選択履修ではなく必修として計画している割合)を見ると、1年生では平成20年度には女子91.2%、男子77.8%だったものが、平成21年度には女子92.0%、男子84.5%と増加していた(図2-1)。しかし、平成24年度には女子87.5%、男子73.7%にまで減少が見込まれていた。また、学年が進むにつれて必修率は

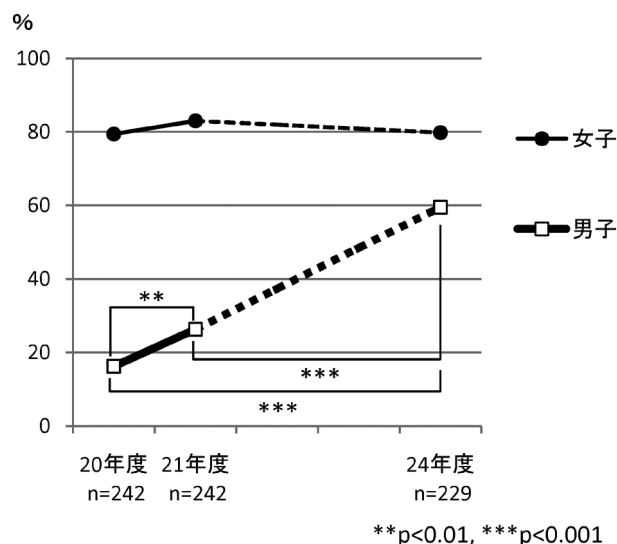


図2-2 中学1・2年生のダンス必修実施率

は低くなっていた。

ただし、新学習指導要領では中学校1,2年生のうちに必修で実施することと示していることから、1年生もしくは2年生のいずれかに必修で実施すればよいわけである。そこで1,2年生必修実施率(全回答校のうち1,2年生のいずれかで必修でのダンス実施計画がある学校の割合)を分析すると、女子では平成20年度で79.4%、平成21年度で83.0%、平成24年度で79.8%、男子では平成20年度で16.2%、21年度で26.3%、24年度で59.5%であった。女子の1,2年生必修実施率は横ばい状態であったが、男子

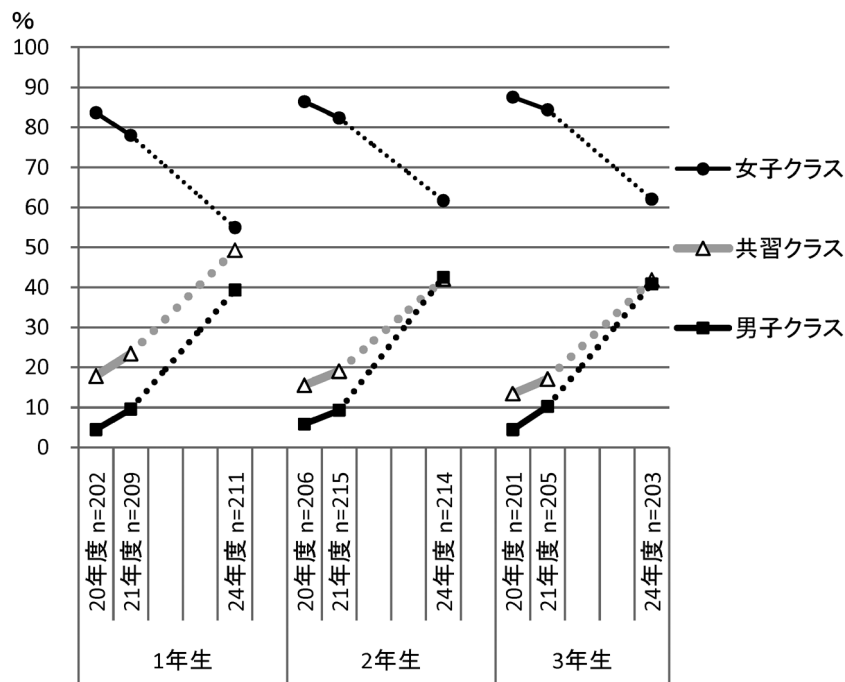


図3 クラス編成率の学年別年次推移

の1, 2年生必修実施率は有意に増加していた(図2-2)。

### 3.2.3 ダンス授業のクラス編成

ダンス授業のクラス編成(男女共習か別習か)について学年別の年次推移を図3に示した。回答は複数回答(例:共習クラスと女子クラスを実施)を含んでいる。各学年とも平成20年度には80%以上を占めていた女子クラスは年々減少し、平成24年度には60%程度と有意に減少する見込みであった。代わりに共習クラスが15%程度から40%程度に、男子クラスが5%程度から40%程度に有意に増加していた。特に1年生では共習クラスが平成24年度に49.3%まで増加する見込みであり、その分女子クラスが55.0%まで減少していた。

これらのことから、男子のダンス実施に際しては、既存の女子クラスを共習クラスへと転換して実施する学校と、新たに男子クラスを増設する学校があることが分かった。その割合を見ると、平成20年度では8割、21年度では7割が共習クラスであった。男子へのダンス実施は主に共習クラスで実施していることが分かった。ただし、平成24年度には男

子クラスも増設され、共習クラスと同等の実施率が見込まれていた。

### 3.2.4 ダンス単元の年間配当時数

女子では各学年とも平成20年度から21年度にかけて9時間程度から若干減少し、1, 2年生では平成24年度にかけてさらに減少傾向が続いていたが有意差は認められなかった。男子では平成20年度から21年度にかけて7時間程度から若干減少しているが、平成24年度には7.5時間程度が計画されており、特に1, 2年生で有意な時数増が認められた(図4-1)。

この単元時数の推移を男女共習、別習のクラス編成別に分析した結果が図4-2である。各年度・各学年とも最も単元時数が多い女子クラスは9時間以上でほとんど変わらずに推移していたのに対し、共習クラスは7時間から8時間、男子クラスは最も少なく6時間から7時間程度で変動していた。女子クラスと共習クラスでは1時間以上の差が、男子クラスとは2時間以上の有意な差があった(表3)。この結果から、男子のダンス単元に女子ほど時数を配分できないとの性差意識が窺えた。同時に、クラス編成別(図4-2)で見ると女子クラス単独の単元時数

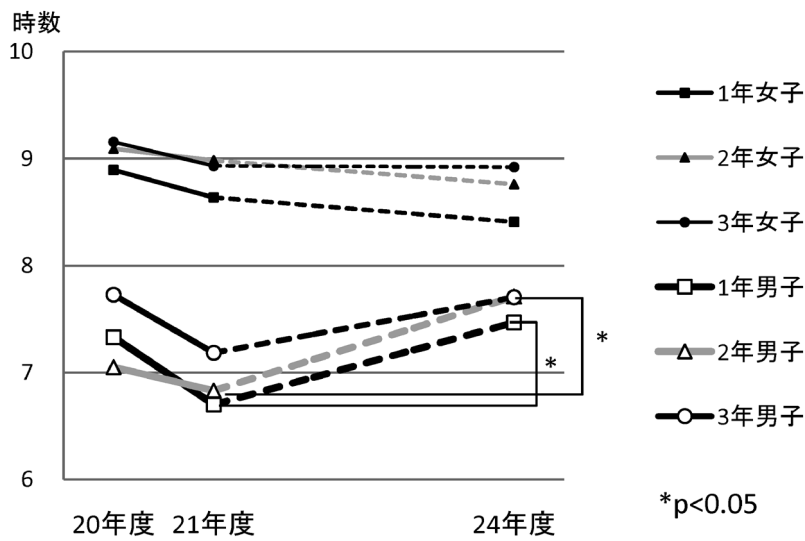


図 4-1 ダンス单元変換配當時数の年次推移

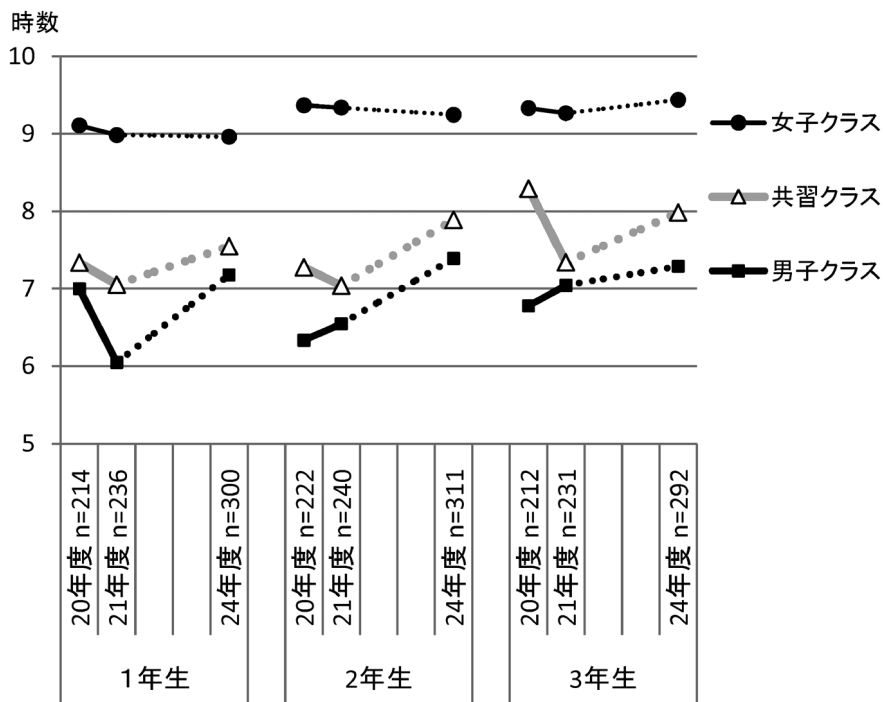


図 4-2 クラス編成別ダンス单元時数の推移

はほとんど増減していないにも拘らず、3.2.3の図3で示したように男子のダンス実施増により既存の女子クラスから单元時数の少ない共習クラスへと転換する割合が増えるにつれて、女子全体の单元時数は減少する傾向にある(図4-1)という状況にあった。

### 3.2.5 ダンス担当教員

ダンス授業の担当者について3学年男女別の回答の延べ人数をみると、男性教員が平成20年度には253名、21年度には327名、24年度には628名と3倍に増加する見込みであった。また、女性教員も平成20年度には518名、21年度には588名、24年度には

表3 単元時数のクラス編成による差の推移

		共習クラス		女子クラス		男子クラス		p 値	
		MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	共-女	女-男
1 年生	平成20年度	7.3	3.3	9.1	3.4	7.0	3.7	**	n.s.
	平成21年度	7.1	2.8	9.0	2.9	6.0	3.0	***	***
	平成24年度	7.5	2.8	9.0	3.1	7.2	2.4	***	***
2 年生	平成20年度	7.3	2.5	9.4	3.4	6.3	3.1	**	**
	平成21年度	7.0	2.5	9.3	3.2	6.5	2.9	***	***
	平成24年度	7.9	2.8	9.2	3.1	7.4	2.4	**	***
3 年生	平成20年度	8.3	4.5	9.3	3.6	6.8	3.5	n.s.	‡
	平成21年度	7.3	3.1	9.3	3.6	7.0	2.9	**	**
	平成24年度	8.0	2.9	9.4	3.1	7.3	2.5	**	***

共習-女子クラスの差 \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001 女子-男子クラスの差 ‡ p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

797名と漸増していた。

これをクラス編成別でみると、女子クラスの減少に伴い女子クラスを担当する女性教員数は減るが、共習クラス、男子クラスの増設に伴い男女教員ともに担当者数が増加する傾向にあることが分かった(図5-1)。

また、クラス編成別の担当者の割合をみると、各年度とも共習クラスでは男女教員ともに70%前後で推移しており、担当教員の男女差は見られなかった。一方、各年度とも女子クラスに対しては女子教員が80%程度担当し、平成20年度、21年度の男子クラスに対しては男性教員が70%程度担当しており、いずれも男女教員の担当比率に  $p < 0.001$  で有意差が認められた。平成24年度には女性教員の男子クラス担当者の割合が50%近くまで増加する見込みであったが、それでも男女教員担当者割合には有意な差があった(図5-2)。すなわち、共習クラスの担当教員に性差はなく、男女別習クラスでは同性の教員が担当する傾向にあり、男子クラス、共習クラスの増設によりダンスを担当する男性教員数が増加しているという関係が明らかになった。

### 3.2.6 ダンス種目の実施計画

ダンス授業計画における平均採択種目数をクラス編成別にみると、平成20年度には共習クラス1.0種目、男子クラス1.3種目、女子クラス1.4種目程度であったものが、平成24年度には共習クラス1.4種

目、男子クラス1.4種目、女子クラス1.5種目程度に増加していた。

その複数回答にみるダンス種目の採択率について各学年クラス編成別の年次推移を表4に示した。

創作ダンスの採択率は各学年とも女子クラスが50%程度と最も高く、年次変化はほとんど見られなかった。共習クラスでは平成20年度では20%程度だったものが平成24年度には40%程度にまで年々増加し、2年生では有意な増加が認められた。平成21年度までは女子クラスと有意な差があったが、平成24年度には差はなくなる見込みであった。男子クラスでの採択率は年々増加するものの30%程度に過ぎず、女子クラスに比べて有意に低かった。

フォークダンスの採択率は平成20年度ではクラス編成による差はほとんどなかったが、平成21年度、24年度では女子クラスより共習クラスで多く採択されていた。特に1年生の共習クラスで最も高く、38.5%の採択率であった。また、有意差は認められなかったものの、共習クラスや男子クラスでの採択率は年々増加していた。

現代的なリズムのダンスは平成20年度、21年度において2、3年生各クラスの最多採択種目であり、平成24年度には全学年各クラスの最多採択種目となる見込みであった。その採択率は男子クラスで最も高く60%程度で推移していた。また、平成20年度、21年度では共習クラスでの採択率が30%程度と他の

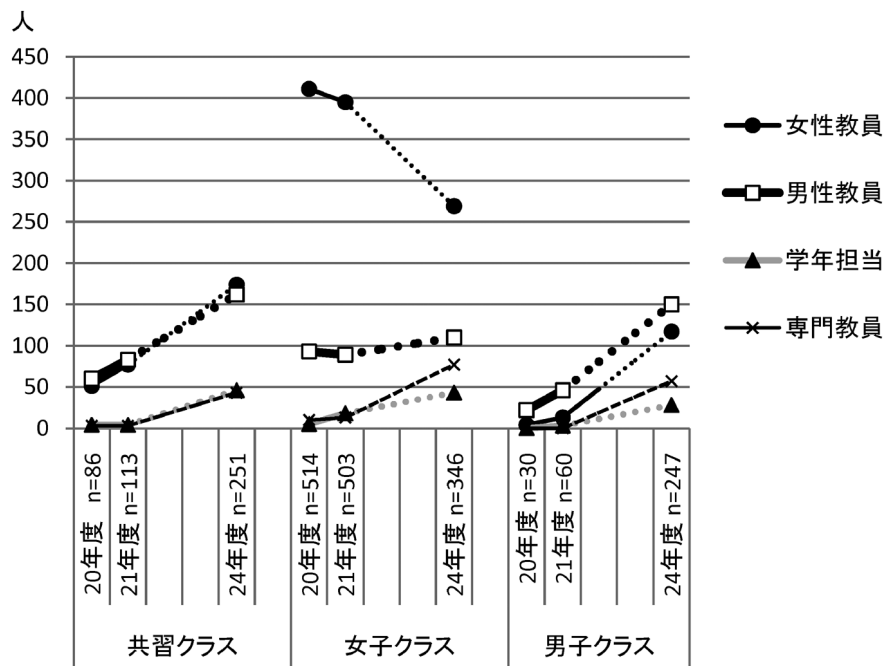
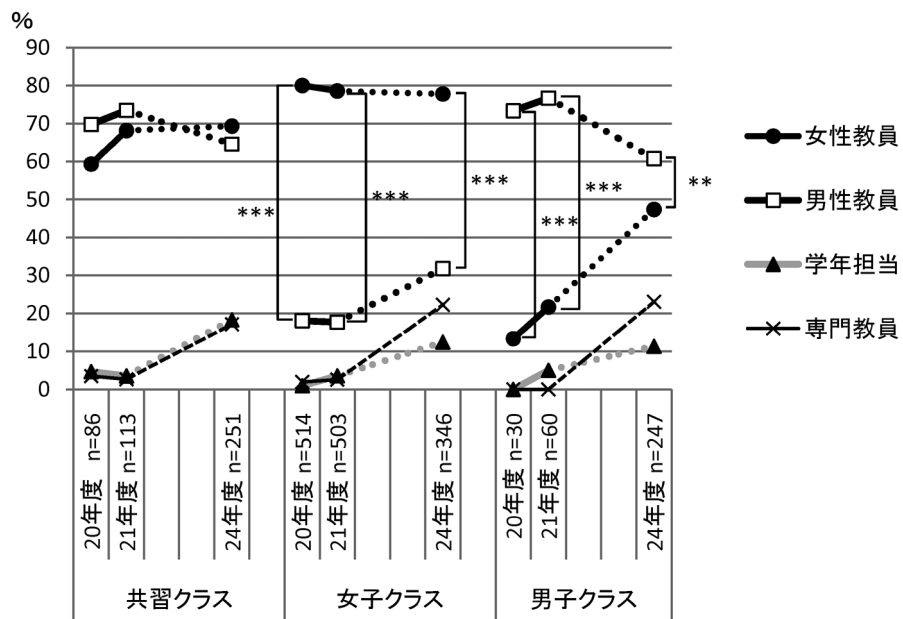


図 5-1 クラス編成別ダンス担当教員数の年次推移



男女担当教員の差 \*\*p<0.01, \*\*\*p<0.001

図 5-2 クラス編成別ダンス担当教員属性比率の年次推移

クラスより有意に低かったが、平成24年度に50%程度まで有意に増加して差はなくなる見込みであった。

これらの結果から、共習クラスはフォークダンス、男子クラスは現代的なリズムのダンス、女子ク

ラスは創作ダンスの採択率がそれぞれ他のクラスより高く、クラス編成により授業内容に違いがあることが判明した。



表4 各種目採択率のクラス編成による差の推移

		1年生				2年生				3年生			
		共習クラス %	女子クラス %	男子クラス %	p値	共習クラス %	女子クラス %	男子クラス %	p値	共習クラス %	女子クラス %	男子クラス %	p値
創作 ダンス	平成20年度	19.4	49.1	22.2	**	15.6	50.6	16.7	*** †	22.2	47.7	11.1	* †
	平成21年度	28.6	53.4	40.0	**	26.8	54.2	36.8	**	28.6	53.4	30.0	** †
	平成24年度	36.5	49.5	36.7	n.s.	40.0	50.0	29.5	**	42.4	52.1	31.3	**
	20年度-24年度	n.s.	n.s.	n.s.		*	n.s.	n.s.		n.s.	n.s.	n.s.	
フォーク ダンス	平成20年度	30.6	24.2	11.1	n.s.	18.8	21.3	8.3	n.s.	14.8	14.2	11.1	n.s.
	平成21年度	42.9	24.5	25.0	*	31.7	18.4	21.1	n.s.	34.3	15.5	10.0	** *
	平成24年度	38.5	25.7	25.3	*	31.1	21.8	25.0	n.s.	29.4	16.8	20.0	*
	20年度-24年度	n.s.	n.s.	n.s.		n.s.	n.s.	n.s.		n.s.	n.s.	n.s.	
現代的な リズムの ダンス	平成20年度	27.8	50.3	66.7	* *	37.5	52.8	58.3	n.s.	33.3	56.8	66.7	*
	平成21年度	36.7	52.8	55.0	*	46.3	55.9	57.9	n.s.	45.7	59.2	65.0	n.s.
	平成24年度	49.0	56.9	57.0	n.s.	58.9	60.5	61.4	n.s.	60.0	62.2	61.3	n.s.
	20年度-24年度	*	n.s.	n.s.		*	n.s.	n.s.		*	n.s.	n.s.	
その他の ダンス	平成20年度	16.7	10.1	0.0	* †	10.3	25.9	33.3	n.s.	25.0	11.9	33.3	*
	平成21年度	14.3	8.6	10.0	n.s.	14.6	6.7	15.8	n.s.	17.1	7.5	15.0	n.s.
	平成24年度	8.7	5.6	7.6	n.s.	7.3	9.4	5.7	n.s.	8.9	5.8	6.3	n.s.
	20年度-24年度	n.s.	n.s.	n.s.		n.s.	*	*		*	n.s.	n.s.	

共習-女子クラスの差 \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001 女子-男子クラスの差 † p<0.05, †† p<0.01  
共習-男子クラスの差 \* p<0.05

表5 授業担当者の性別と各種目採択率

	平成20年度			平成21年度			平成24年度		
	男性教員 n=245 %	女性教員 n=524 %	p値	男性教員 n=305 %	女性教員 n=576 %	p値	男性教員 n=599 %	女性教員 n=820 %	p値
創作ダンス	28.6	47.3	***	38.0	50.5	***	40.4	46.5	*
フォークダンス	22.4	21.8	n.s.	30.8	25.3	n.s.	31.7	29.6	n.s.
現代的なリズムのダンス	45.3	48.9	n.s.	49.5	54.5	n.s.	67.3	66.3	n.s.
その他のダンス	16.7	14.5	n.s.	10.2	10.4	n.s.	5.8	5.5	n.s.

\* p<0.05, \*\*\* p<0.001

### 3.2.7 男女教員の採択ダンス種目

授業担当者の性別による各ダンス種目採択率の違いを分析した結果、創作ダンスは男性教員による採択率が年々有意に増加しているものの、各年度とも女性教員の方が有意に多く採択していた。このことは、女性教員は創作ダンス採択率の高い女子クラスを担当する割合が高いこととも関連していると推察できる。フォークダンスや現代的なリズムのダンス

では男女教員間の採択率に差は認められなかった(表5)。

### 3.2.8 各ダンス種目の授業内容

各ダンス種目の授業内容(平成20年度実施内容・複数回答)について回答率を表6に示した。

創作ダンスでは、82%がまとまった作品創作を行っており、73%がその発表・鑑賞を行っていた。しかし、まとまった作品創作にいたる前段階に多様な

表6 各ダンス種目の授業内容の実施率(平成20年度実施・複数回答を含む)

	創作ダンス n=117		フォークダンス n=72		現代的なリズムのダンス n=143	
	内 容	%	内 容	%	内 容	%
1	グループでテーマを見つけ、まとめた作品を創作する	81.7	マイムマイム, コロブチカなど外国のフォークダンスを覚えて踊る	56.0	作った踊りを見せあって交流する	51.0
2	作った作品を見せ合って鑑賞する	72.5	南中ソーランを覚えて踊る	36.0	簡単な作品を創作する	44.8
3	自然現象や日常生活から観察したことから動きでデッサンする	29.2	体育祭等の演技として発表する	30.7	ロック, ヒップホップなどの音楽に合わせて自由に即興的に踊る	44.8
4	走る-止まる, 跳ぶ-転がる, 等の動きからイメージを発想する	29.2	よさこいソーランを創作して踊る	20.0	いくつかの簡単なステップの習得	31.0
5	様々な課題で即興的に創作する	25.8	踊りの体形変化等を工夫する	10.7	教師指導による既成作品の習得	26.2
6	主題の展開を工夫する	25.8	覚えた踊りを授業内のみで踊る	9.3	ビデオ等による既成作品の模倣	26.2
7	群と空間構成を工夫する	25.8	阿波踊り, 花笠音頭, 八木節など日本の伝統的な踊りを覚えて踊る	9.3	既成作品を応用して体形変化などを工夫する	25.5
8	動きに緩急強弱をつけたり, 様々に変形して強調する	22.5	レクリエーションとして活用する	6.7	アップやダウンのリズムの取り方の習得	22.1
9			地域の踊りを覚えて踊る	1.3	まとまりのあるフレーズを創作する	12.4
10					2人組等で相手と掛け合って踊る	6.9

テーマから表したいイメージをとらえ、動きに変化をつけて即興的に表現<sup>2)</sup>するという創作の基礎的学習や主題の展開, 群の構成などの活用学習を取り入れている学校はそれぞれ30%未満であった。

フォークダンスでは、56%が外国のフォークダンスを、36%が南中ソーランを、20%がよさこいソーランを行っていた。その他の日本の民踊は9%、地域の踊りは1%にすぎなかった。南中ソーランやよさこいソーランを取り上げている学校の多くは、それを体育祭の集団演技として発表していた。また外国のフォークダンスは林間学校等のレクリエーションとして活用されていた。

現代的なリズムのダンスでは、45%の学校が簡単な作品創作を行い、51%が見せあいと交流を行っていた。作品創作にいたる前段階の学習としては、学習指導要領解説<sup>3)5)</sup>に示されているような音楽に乗って自由に踊る45%、相手と対応して踊る7%などの自由な動きの創出学習に対し、簡単なステップの

習得31%、教師指導による既成作品の習得26%、ビデオ等による既成作品の模倣26%など、定型の動きの習得学習や模倣学習も多く見受けられた。

### 3.3 教員の意識

#### 3.3.1 ダンス男女必修化への評価

ダンス男女必修化に対する教員の評価をみると、肯定評価が36.8% (非常に良い3.7%, まあ良い33.1%), 否定評価が35.9% (あまり良くない29.0%, 非常に良くない6.9%), わからない27.8%であった(図6)。

肯定評価の理由としては、①中学校期には様々な運動種目を体験させるべき39.6%, ②ダンスには他の運動にない特性・教育価値がある32.5%, ③ダンスは男女差・技能差に関係なく取り組める20.4%などがあげられていた。否定評価の理由としては、①ダンスを指導できる教員が少ない51.7%, ②男子へのダンス指導は難しい, 不安である42.9%, ③羞恥心が強い年頃なので自己表現は難しい32.1%, ④全

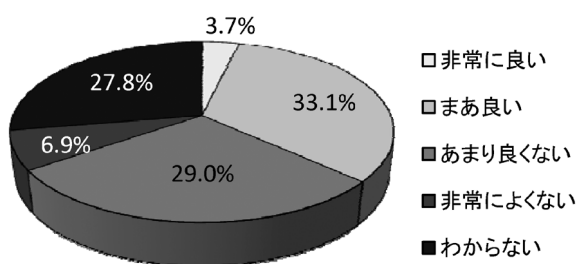


図6 ダンス男女必修化に対する評価 (n=240)

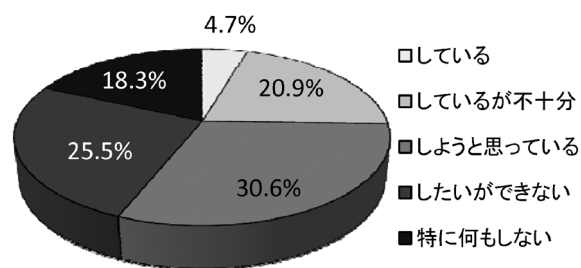


図8 指導法研修・教材研究の現状 (n=235)

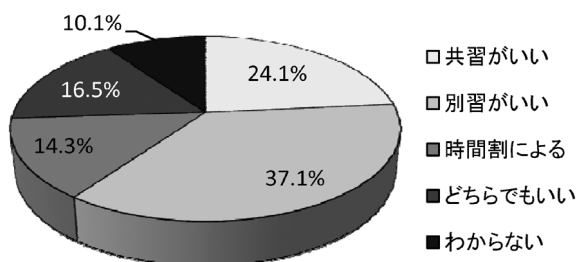


図7 男女共習・別習への評価 (n=237)

領域必修にすると1種目の時間が不足する29.2%、⑤ダンスへの適性には個人差があるので選択でよい21.3%などであった。指導者不足、指導力不足で対応できないことからの否定理由が多く、次いで生徒の適性の問題があげられていた。

### 3.3.2 共習・別習の評価

ダンス授業のクラス編成は男女共習・別習のどちらで行うのが適かについて、共習がいい24.1%に対し、別習がいい37.1%の方が1.5倍の回答率であった。また、時間割の都合による14.3%やどちらでもいい16.5%、わからない10.1%などの中立的意見と3分されていた(図7)。

共習肯定理由は①男女共習だと互いの良さが分かり表現の幅が広がる33.5%、②ダンスを指導できる教員が少ないので共習がいい16.7%などであった。別習肯定理由は①別習の方が異性を気にせずのびのびと踊れる47.0%、②他の種目が男女別習なのでダンスも別習がいい27.0%、男性教員は男子クラス、女性教員は女子クラスがいい13.0%などであった。いずれの意見も生徒の学習効果を第一の理由に挙げてはいるが、教員側の都合も影響している様子が窺えた。

### 3.3.3 指導法研修・教材研究の有無

ダンス必修化に向けて指導法研修・教材研究をしている教員は25.6%(している4.7%, しているが不十分20.9%), していない教員は74.4%(しようと思っている30.6%, したいができない25.5%, 特に何もしない18.3%)であった(図8)。

研修・研究をしていない教員や不十分だと回答した教員の理由は、①忙しくて研修・研究の時間が取れない67.3%、②適当な研修会や教材資料が見当たらない30.3%、③これまで実践してきた内容・方法で対応できる20.7%、④ダンスより他の種目の研修・研究が優先される19.2%、⑤休暇が取りづらい18.8%、⑥研修を受けてもすぐには身に付かない16.8%、⑦当分、自分はダンスを担当しない7.2%などであった。研修の必要性を感じながらも多忙のため対応できていない教員が非常に多いことが分かった。

## 4. 考 察

### 4.1 ダンス男女必修化への理解と実現度

学習指導要領改訂に伴うダンス男女必修化により、男子のダンス実施率は着実に増加してきているものの、完全実施の平成24年の計画においても1,2年生必修実施率は女子で80%、男子で60%に過ぎなかった。また、男子のダンス単元時数は女子より2時間も少なかった。ダンスの適用に対する性差意識は根強いといえる。ダンス男女必修化に対する教員の評価は賛否両論で、全領域必修やダンスの教育価値を認める推進派と、指導力不足や男子の指導に対する不安からの消極派に分かれていた。

これらの結果から、全領域必修化を謳った新学習指導要領の意図が十分に理解・反映されているとはいえなかった。本来ならば完全実施の平成24年度にはダンス領域も100%必修化されてしかるべきであるが、4割の教員が未だにダンスは女子の領域、あるいは実施する必要のない領域と考えていることが明らかになった。しかしながら、平成元年の改訂でダンスが男女共修化されて以来20年経っても男子のダンス実施率が10%程度で推移してきた経緯と比較すると格段の実施計画の変容と評価できる。

#### 4.2 クラス編成と授業担当教員、ダンス種目の関係

男子のダンス実施に際しては男女共習クラスと男子クラスの両方が計画されており、年々それらのクラスが増加し、女子クラスは減少していた。また、特に男性のダンス担当教員数が急増していた。従来は保健体育科教員の中で数少ない女性教員が中心となって担当していたダンス授業だが、全体の授業数の増加に伴い必要なダンス担当教員数が増加し、指導経験の少ない男性教員も担当せざるを得なくなったというのが実情であろう。また、クラス編成を共習・別習のいずれにするかの判断理由として「ダンスを指導できる教員が少ないから共習で対応する」や「別習にして同性の教員が担当する方が指導しやすい」という理由と関連して、男性教員は主に男子クラスや共習クラスを担当するよう計画していたと考察された。

一方、クラス編成により採択ダンス種目に違いが認められ、共習クラスではフォークダンスが、男子クラスでは現代的なリズムのダンスが、女子クラスでは創作ダンスが他のクラスより多く採択されていた。また、創作ダンスは女性教員に多く採択されていた。創作ダンスはイメージ・テーマをもとに生徒の創意で動きを創出する学習であり、ダンス領域の3種目の中でも最も指導が難しいとされている<sup>9)11)</sup>ことから、指導経験豊かな女性教員が担当する女子クラスでは創作ダンスが多く採択されるが、指導経験の少ない男性教員が担当する男子クラスや共習クラスでは創作ダンスはあまり採択されないという関

係が見えてくる。

同様に、フォークダンスは「動きが簡単で誰でもすぐにできる」、「定型の動きの習得学習なので指導がしやすい」ことなどが従来の調査<sup>9)12)13)</sup>でもあげられていたように、男女教員が指導する共習クラスでは、簡単に指導できるフォークダンスから取り組もうとする教員の姿勢が窺えた。また、男性教員が多く担当する男子クラスでは現代的なリズムのダンスが多く採択される傾向にあったが、その学習内容は学習指導要領解説<sup>3)</sup>が示す「リズムをとらえて自由に」「相手と対応しながら」「変化のある動きを組み合わせて」踊るという自由な動きの創出学習とは異なり、「与えられた動きを覚えて踊る」という定型の動きの習得・模倣学習のみに歪曲される可能性があるかと危惧された。このような現代的なリズムのダンスの特性についての教員の誤解は、前回の学習指導要領改訂後(2003年)の調査<sup>11)</sup>時点から続いている問題である。

#### 4.3 ダンス授業の展望

ダンス男女必修化により男子のダンス実施率は着実に増加してきており、新学習指導要領に沿ったダンス授業計画はある程度先行実施されてきていると評価できる。クラス編成は共習・別習の両方が行われ、新たに指導を担当する男性教員が増えていた。生徒のみならず教員も男女必修化されつつあった。

一方、中央教育審議会答申<sup>15)</sup>では、「生きる力」という理念の実現のために、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」とともに、「知識・技能を活用する学習活動やこれらの成果を踏まえた探究活動を通して、思考力・判断力・表現力等を育成することがはぐくむ」ことが重要とし、その具体的方法として「体験から感じ取ったことを表現する」「課題について、構想を立て実践し、評価・改善する」「互いの考えを伝えあい、自らの考えや集団の考えを発展させる」等を挙げている。村田芳子<sup>7)</sup>や高橋和子<sup>14)</sup>は、ダンスには「習得・活用・探求」の学習が組み込まれており、とりわけ創作ダンスや現代的なリズムのダンスは集団学習のスタイルによる探求型の学習(課題解決学習)を主体として、コミュニケーション

コン能力や互いを認め合う態度, 論理的思考力を育むことができるとし, ダンス必修化の意義を論じている。しかし, 指導経験の少ない男性教員は創作ダンスを敬遠し, また, 現代的なリズムのダンスは村田や高橋の提唱する探求型の学習には及ばず, 習得型・模倣型の学習に終始している学校も少なくなかった。ダンス指導経験の少ない男性教員が多く指導を担当するようになってきているにも拘らず, 教員の指導研修・教材研修の実施率は低く, 指導力向上は当分期待できそうになかった。

これらの結果から, ダンス授業の実施率は増えるものの, 学習内容や学習の質は低下する可能性が予測される。教員の指導力養成, 指導体制の強化が急務であろう。

## 5. 結 論

新中学校学習指導要領実施前後の実態調査により, 保健体育科の体育分野全運動領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望について, 以下のことが明らかになった。

- 1) ダンスの実施率は年々増加してきており, 1, 2年生必修実施率は女子では80%で変化がなかったが, 男子では10%から60%まで増加する計画が見込まれていた。
- 2) 男子の単元時数は女子よりも2時間程度も少なかった。
- 3) 男子の実施に際しては男女共習クラスと男子クラスの両方がほぼ同数で計画されていた。共習クラスの増加に伴い, 女子クラスは減少していた。
- 4) ダンス授業を担当する男性教員数が急増していた。共習クラスは男女教員が, 男子クラスは男性教員が, 女子クラスは女性教員が担当する傾向にあった。
- 5) 採択ダンス種目は, 現代的なリズムのダンスが最も多く, 次いで共習クラスではフォークダンス, 女子クラスでは創作ダンスが多かった。現代的なリズムのダンスは即興的な動きの創作学習ではなく, 既成の動きの習得学習を中心に実施していた学校も少なくなく, 学習の質が十分確保され

ているとはいえなかった。

- 6) 多くの教員がダンス指導法や指導力養成の必要性を感じていたが, 教員のダンス指導研修・教材研究はあまり進んでいなかった。

以上から, ダンスは男女必修化での実施が着実に進んできている反面, 指導経験の少ない教員が担当する割合の増加とともに学習の質が低下する可能性があることが示唆された。

## 謝 辞

本調査に際し, 東京都公立中学校保健体育科の諸先生方には快くご協力を賜り, 誠実なご回答をお寄せいただきました。先生方のご厚意に心より感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 文部科学省(2008)小学校及び中学校の学習指導要領等に関する移行措置並びに移行期間中の学習指導について(通知)。
- 2) 文部科学省(2008)中学校学習指導要領, 1-19, 85-97, 東山書房, 東京。
- 3) 文部科学省(2008)中学校学習指導要領解説保健体育編, 1-14, 118-133, 東山書房, 東京。
- 4) 文部省(1998)中学校学習指導要領, 1-6, 71-79, 大蔵省印刷局, 東京。
- 5) 文部省(1998)中学校学習指導要領解説保健体育編, 62-70, 東山書房, 東京。
- 6) 文部省(1989)中学校学習指導要領, 76-81, 大蔵省印刷局, 東京。
- 7) 村田芳子(2008)表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは?—学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐ—, 体育科教育 56-3, 14-18。
- 8) 中村恭子(2009)中学校ダンスの男女必修化の課題—中学校教員を対象とした調査にもとづいて—, 順天堂スポーツ健康科学研究 1-1, 27-39。
- 9) 中村恭子, 浦井孝夫(2005)ダンス領域内の種目採択に影響を及ぼす要因の検討—創作ダンスと現代的なリズムのダンスの比較—, 順天堂大学スポーツ健康科学研究 9, 11-20。
- 10) 中村恭子, 浦井孝夫(2005)中学校における体育の種目選択性に関する研究—ダンス領域を中心とした現

- 状と問題点一, 順天堂大学スポーツ健康科学研究 9, 52-56.
- 11) 中村恭子, 武井正子, 浦井孝夫(2003)「現代的なリズムのダンス」の実施状況と教員の意識に関する研究—学習目標と学習内容の検討—, 日本体育学会第54回大会号, 616.
- 12) 中村恭子, 浦井孝夫(2003)ダンス教育の目標に関する研究—高等学校のダンス担当教員の評価にもとづいて—, 順天堂大学スポーツ健康科学研究 7, 75-79.
- 13) 中村恭子, 武井正子, 浦井孝夫(2002)高等学校におけるダンス授業のカリキュラムに関する研究—実態調査にもとづいて—, 順天堂大学スポーツ健康科学研究 6, 94-105.
- 14) 高橋和子(2008)なぜいま「ダンス必修化」なのか?, 体育科教育 56-3, 20-23.
- 15) 中央教育審議会(2008)幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申), 21-29.

(平成21年12月4日 受付)  
(平成22年4月26日 受理)